

報告 2 : 劉文静 (岩手県立大学)

「養老」における農地の生活保障的機能の変容と農業者公的年金制度の整備——中国広東省梅州市の事例を手掛かりに——

中国では農業生産者の医療や年金などの社会保障制度が問題視されている。本研究では、調査実証により「新農保」(農業者公的年金制度で、個人の積み立てによるもの)導入の農態を見つめ、農地の生活保障における経済的機能の変容および今後の農業者の老後生活における展望を明らかにすることを目的とする。

本研究の調査地である梅州市五華県は広東省の東北部に位置し、客家と呼ばれる漢民族の一群集が聚住する地域である。苑河村は典型的な人口が多く農地が少ない村であり、農業以外の産業も発達していないため貧困地域として位置づけられる。県や鎮内での農外就労、商売や出稼ぎのための外出者も多く、農業所得よりも農外稼ぎ依存型の地域でもある。2011 年以降、貧困脱出への強力な政策的支援の下で、貧困世帯が 170 戸以上から 41 戸にまで減少した。

村の 32 戸の農家戸別訪問による現地調査を実施した。その結果、老後は自己積み立てなしの政府からの年金および息子頼みというのがこの地域の特徴であるということがわかった。

政府が進める老後の生活保障に関しては、貧困脱出と一体化して進められており、個人の積み立てなしに一定年齢を過ぎれば年金が受け取れる。そのため、各地で取り組まれている「新農保」への加入はこの村ではさほど進展していない。しかし、政府からの年金はいつまでも続かないであろうことは想像に難くない。そのため、やはり自己積み立てによる農業者年金制度自体の整備と改善は、中国にとっては依然として大きな課題であろう。

また、少ない農地でも手放さず、老後は息子が引き継ぐ傾向がある。家庭内老後扶養も特に息子世帯に強く期待する点が特徴的である。そのため、男子を出産する意識が強く、厳しい計画出産政策の中でも子供を 4 人以上持つ家族が多く見られる。これまでの研究において湖北省や広東省の珠江デルタ地帯を調査してきたが、苑河村はそれら地域と比較して、老後は息子に面倒をみてもらう風習や親の期待感が強く浮き彫りになっている。これは調査対象地だけの特質ではなく、客家という家族的文化的特質でもあろう。だが、中国社会全体の少子高齢化の中で、伝統的文化と意識がどこまで持続でき、どのように影響されるのか、今後見極める必要がある。